

妊娠高血圧症候群

妊娠高血圧症候群とは？

妊娠 20 週以降に高血圧があらわれ、産後 12 週までに血圧が正常になる場合をいいます。収縮期血圧が 140mmHg 以上（重症では 160 mmHg 以上）、あるいは拡張期血圧が 90mmHg 以上（重症では 110 mmHg 以上）になった場合、高血圧があらわれたといえます。高血圧に前後して蛋白尿（尿中に蛋白が 1 日当たり 0.3g 以上出ること、重症では 2g 以上）がでることがあり、この場合も妊娠高血圧症候群と診断します。

この病気は、妊婦さん約 20 人に 1 人の割合で起こります。妊娠 32 週以降に発症することが多いのですが、妊娠 32 週未満で発症した場合は早発型と呼ばれ、重症化しやすく注意が必要です。

重症になるとお母さんには血圧上昇、蛋白尿に加えてけいれん発作（子癇）、脳出血、肝臓や腎臓の機能障害、肝機能障害に溶血と血小板減少を伴う HELLP 症候群などを引き起こすことがあります。

赤ちゃんは発育が悪くなったり（胎児発育不全）、胎盤が子宮の壁からはがれて赤ちゃんに酸素が届かなくなり（常位胎盤早期剥離）、赤ちゃんの状態が悪くなり（胎児機能不全）、急に亡くなってしまう（胎児死亡）など、お母さんと赤ちゃん共に大変危険な状態となることがあります。



どんな人がなりやすいのですか？

もともと糖尿病、高血圧、腎臓の病気などを持っている、肥満、お母さんの年齢が高い（40歳以上）、家族に高血圧の人がいる、双子などの多胎妊娠、初めてのお産（初産婦）、以前に妊娠高血圧症候群になったことがある妊婦さんはこの病気になりやすいので注意が必要です。

なぜこの病気になるか様々な研究が進んでいますが結論は出ていません。最近の研究では、お母さんから赤ちゃんに酸素や栄養を補給する胎盤がうまくできないため、胎盤で様々な物質が異常に作られ全身の血管に作用し病気を引き起こすのではないかとされています。

治療法は？

治療は、安静と入院が中心です。けいれん予防のためや重症の高血圧に対してお薬を用いることがあります。妊娠中のため使える薬に制約があります。急激に血圧を下げると赤ちゃんの状態が悪くなることもあり注意が必要です。食事療法も行いますが、過度な塩分制限はかえって良くないと言われています。

お母さんや赤ちゃんにとって妊娠を続けるよりも、早産になっても妊娠を終わらせたほうが良いと判断せざるを得ない場合があります。出産が一番の治療であり、出産後はお母さんの症状は急速に良くなります。当院では、妊娠を終わらせる必要がある場合には、計画的な分娩誘発や、必要に応じて帝王切開を行っています。

重症化した人は、出産後も高血圧や蛋白尿が持続することがありフォローアップが大切です。

ならないようにするにはどうしたらよいのですか？

この病気にかかるかどうか早めに知ることができないか、病気を予防できないか様々な方法が試みられてきましたが、未だ確立されたものはありません。妊婦健診をきちんと受診し、自宅での血圧測定や入院などの指示に従っていただくことが最も大切なことです。